

串本海中公園 マリンパビリオン

2024. 5

Vol. 53, No. 3



ウモレオウギガニ

Zosimus aeneus (Linnaeus, 1758)

甲幅は8cmほど。体色は光沢のある茶褐色のまだら模様。扇形の甲の後半部は細分されてうろこ状を呈している。サンゴ礁域や岩礁域に生息し、礁原のすきまやサンゴ塊の下などに隠れている。分布は主に琉球列島以南とされているが和歌山県内でも記録があり、この写真の個体も2009年に串本町内のイセエビ刺し網にかかったものである。地域によっては筋肉中に毒を蓄積していることがあり、過去には死亡例がある。

オウギガニ科 ウモレオウギガニ属 中村 公一

串本海中公園センター

串本産ウミウシ (3)

松永 康大

前回の串本産ウミウシ (2) ではウミウシ類の形態的特徴について紹介した。今回から串本で採集されたウミウシ類を種ごとに紹介する。

串本産ウミウシ類

アオウミウシ *Hypselodoris festiva* (図1)

本種は裸細目ドーリス下目イロウミウシ科アオウミウシ属に属する。体形はナメクジ型で体の地色は青色。外套膜の周縁部は黄色、正中線上に黄色い縦線が1本、その周辺に黄色や黒色の斑点がある (図1.①,②)。外套膜の模様には変異が多く斑点が無い個体もいる。触角は細長く先端がやや尖り、橙色の褶葉がある (図1.③)。鰓は外套膜の後方に位置し円形に広がり、中心には肛門がある (図1.④A)。鰓の地色は白色で軸が橙色。触角と鰓は刺激を与えると引っ込む。

串本では周年観察される。特に春から初夏にかけて岸壁や磯でよく見られる。図の個体は体長3.0 cmで2024年1月22日に鯖浦海岸で採集された。

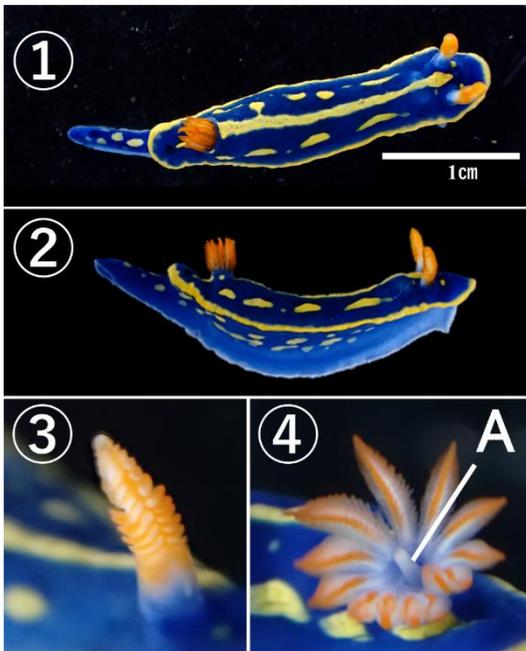


図1. アオウミウシ *Hypselodoris festiva*

①背面、②側面、③触角、④鰓、A 肛門

アカエラミノウミウシ *Sakuraeolis enosimensis* (図2)

本種は裸細目枝鰓亜目オオミノウミウシ上科ヨツスジミノウミウシ科アカエラミノウミウシ属に属する。体形はナメクジ型でやや細長い。体の地色は半透明の白色で細かい白色斑点がある (図2.①,②)。尾は長く白色線が1本あり、外套膜や頭部は部分的に橙色を帯びる。背側突起は細長く正中線を中心にして左右約5対、1箇所から複数生え、色は半透明の橙色で先端が白色 (図2.④)。背側突起の内部には消化腺があり (図2.④D)、先端には餌生物から得た刺胞を蓄える (盗刺胞) 刺胞囊がある。前足隅は橙色で先端が白色 (図2.③C)。触角と口触手は細長く先端は尖り、口触手の方が長く、色は橙色で先端が白色、白色線が1本ある (図2.③A,B)。摂餌した餌により橙色部の色は変化し白色から橙色の個体が多い。

串本では磯の転石裏などで見られる。図の個体は体長3.9 cmで2024年1月25日に紀伊大島の磯で採集された。

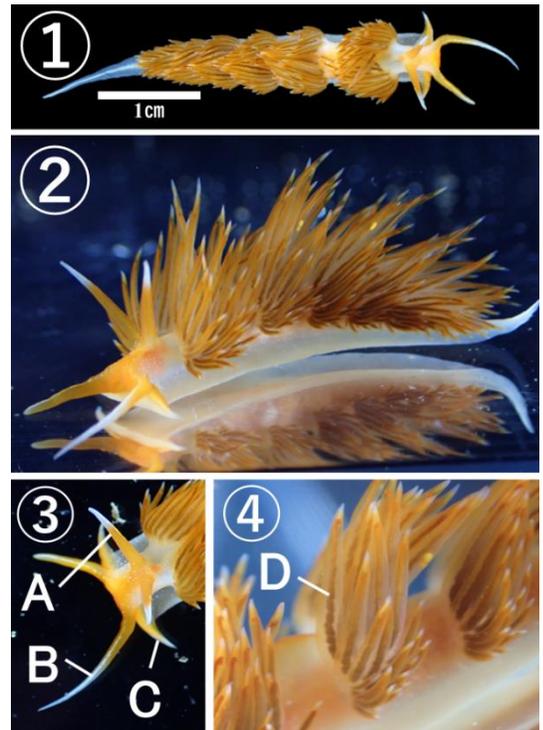


図2. アカエラミノウミウシ *Sakuraeolis enosimensis*

①背面、②側面、③触角、A 触角、B 口触手、C 前足隅、④背側突起、D 消化腺

ミスガイ *Hydatina physis* (図3)

本種はオオシノミガイ目ミスガイ科ミスガイ属に属する。軟体部は著しく扁平し、周縁部が波打つ。体の地色は褐色を帯びた桃色で個体により濃淡に差がある(図3.①,②)。周縁部は薄い青白色。外在性の大きな薄い殻をもつ(図3.④)。蓋はなく、軟体部は殻の中に収納できない。殻表には多数の黒色螺帯と淡褐色の縦線がある。顔の正面には頭楯があり、その後方に口触手がある(図3.②A,③B)。頭楯、口触手共に体と同じ色である。

串本では周年観察される。日中は砂の中に潜るためあまり見られないが、夜間の潮間帯のタイドプールでは普通に見られる。図の個体は体長7.5 cmで2024年1月8日鯖浦海岸の磯で採集された。

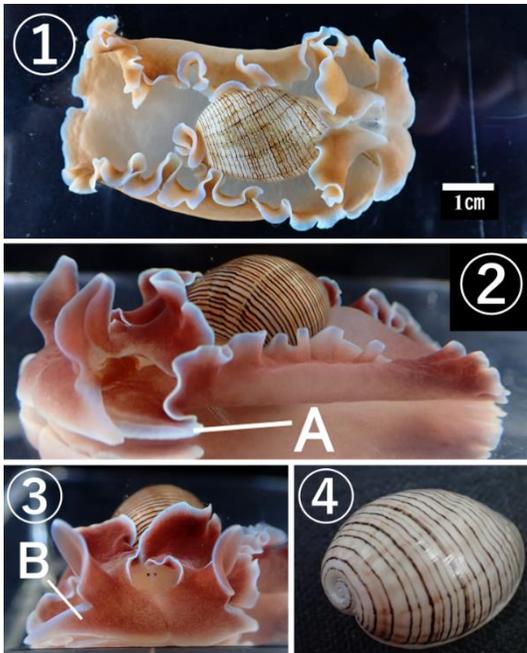


図3. ミスガイ *Hydatina physis*

①背面、②側面、A 口触手、③正面、B 頭楯、④殻

タツナミガイ *Dolabella Auricularia* (図4)

本種はアメフラシ目アメフラシ科タツナミガイ属に属する。体形は円錐形で、後部は斜めに切られたような形状で中心に出水管がある(図4.①A)。出水管は呼吸を行うための水の出入り口である。強い刺激を与えると紫の液体を出水管から出す。背面は左右から伸びる側足で覆われ、体表に

は小突起が散在する(図4.①,②)。体の地色は褐色から灰褐色、暗緑色などで、斑模様があり変異に富む。体内には埋在する薄い板状で渦を巻いた殻がある(図4.④)。殻の色は白色や褐色である。触角は円筒状で先端から真ん中あたりまで斜めに切りとったような形状で、色は体の地色と同様(図4.③C)。口触手は触角より短く太い円筒形で同様に切れ込みが入り、色は触角と同様(図4.③B)。

串本では周年観察される。磯の潮間帯などでよく見られる。日中は岩の隙間などに潜んでいることが多いが、夜間になると活発に活動する。本種は海藻類を食べることが知られているが、オキアミやキビナゴを食べる様子も確認された。なお、嗜好性が高いのは海藻類である。図の個体は体長10.5 cmで2023年12月24日に鯖浦海岸の磯で採集された。

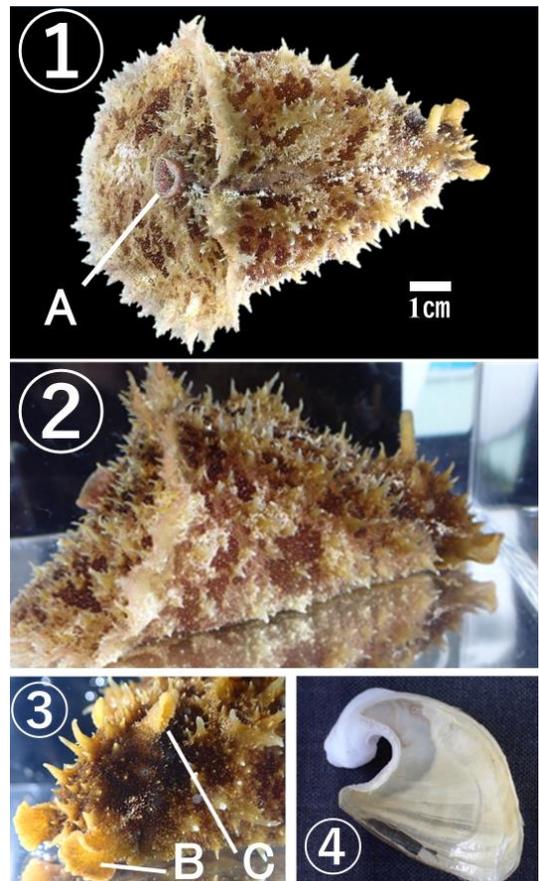


図4. タツナミガイ *Dolabella Auricularia*

①背面、A 出水管、②側面、③頭部、B 口触手、C 触角、④貝殻

海中展望塔に集まる魚 2023 年 後日談

佐久間 夢実

前回の海中展望塔に集まる魚 2023 年の報告 (Vol.53, pp.13-15) では、展望塔に集まる魚の一年間の記録を報告した。今回も報告内では紹介できなかった 2023 年の魚類観測の記録をここに残す。なお、前回の後日談 (Vol.52, pp.20-21) と同様の方法で紹介する。前述の報告と合わせてご覧いただきたい。

○前年 (2022 年) より多く出現した魚種

①キンセンイシモチ

3 月～12 月出現、出現率 34%

前年は 11 月～12 月に出現率 8% を記録したが、本年はほぼ通年出現した。彼らの住処は南側の窓から見えるクシハダミドリイシの陰で、10 匹未満の群れを観測した。展望塔からさらに沖に行くと、岩礁とサンゴの群落によって形成された水路があり、その近辺の岩陰で本種の小規模の群れがよく見られる。



図 1. キンセンイシモチ

②ヤリカタギ

通年出現、出現率 83%

前年は 8 月～12 月に出現率 28% を記録していたが、本年は通年出現し、出現率は大幅に増加した。①と同様に、南側のクシハダミドリイシや、スギノキミドリイシの隙間を住処にしていた。前年の 8 月から出現しているため、通算すると 17 か月の間本種を観察することができた。大小様々な個体が出現していたため、数匹が近辺を住処にしていたようだ。



図 2. ヤリカタギ

③ミスジチョウチョウウオ

9～11 月出現、出現率 13%

前年は出現しなかったが、本年出現した 9～11 月の内、ほぼ毎回観察することができた。本種は展望塔周辺で観測できるチョウチョウウオ科の中でも比較的低温に強いようだが、大抵見られるのは 5 cm 程度の小型の個体であり、地先海域ではそれ以上の大きな個体を見たことがない。



図 3. ミスジチョウチョウウオ

④ミズレチョウチョウウオ

10～12 月出現、出現率 14%

前年は 1 月に出現率 0.5% を記録したが、本年は大幅に増加した。出現した個体はおそらく同個体で、2024 年に入っても出現が継続的



図 4. ミズレチョウチョウウオ

に確認されている。展望塔付近で潜水していると稀に見られるが、多くはない。展望塔南東に位置するクシハダミドリイシ付近を住处とし、同科トノサマダイと共に泳ぐ姿をよく観測した。

⑤ゴマチョウチョウウオ

5～9月出現、出現率20%

前年は8月に出現率2%を記録していたが、本年は大幅に増加した。おそらく毎回同個体で、①や②と同じ場所で観測した。展望塔付近での潜水中、本種を見たことはないが、過去には定置網で時々採集されていた。

⑥イシガキスズメダイ

7月～12月出現、出現率 36%

前年は11月に出現率7%を記録しており、本年で出現率が大幅に増加した。①や②と同様に南側のサンゴ付近で2～3匹観測したが、それぞれの縄張りがあり個々で行動していた。少々気性が荒く、時折同種の個体が縄張りに近づくと、それを追い払う光景を度々目の当たりにした。

⑦ハクセンスズメダイ

7～11月出現、出現率18%

前年は11～12月に出現率1%を記録しており、本年は出現率が大幅に増加した。主に展望塔南東の橋の下にある岩礁に現れた。展望塔の窓からは少々離れているため、目を凝らさないと発見できないが、幸いにも特徴的な白い横筋模様によりすぐにわかる。夏になると、当館の目の前の磯にて度々観測される。

⑧ブチススキベラ

3月以外の全ての月で出現、出現率32%

前年は8・10・12月以外の全ての月に出現率15%を記録した。本種の幼魚は枯葉のような容姿をしており、体を湾曲させ水中を舞うようにして泳ぐため、一見すると魚とわからず見逃してしまう。15cmほどの成魚は展望塔

周辺で通年見られ、時々2～3匹の群れで泳いでいる。



図5. ブチススキベラ

⑨クギベラ

4～7月以外の全ての月で出現、出現率24%

前年は1・2・7・12月に出現率8%を記録している。前述の①や②と同じように、南側のサンゴ群落周辺で観測した。出現したのは全長8cmほどの幼魚で、展望塔周辺での潜水中でもこの大きさの本種をよく見る。他のベラ科に比べると非常に動きが素早く、すぐにサンゴの間に隠れる印象がある。

⑩ネズミフグ

3・4・6～12月に出現、出現率17%

前年は4月と6月に出現率2%を記録していたため、出現率は大幅に増加した。ほぼ通年見ることのできる同科のイシガキフグに比べると、本種の展望塔付近での出現は少ないが、観測中に2匹同時に出現することもあった。連日観測することもあったため、付近で居ていたものと思われる。イシガキフグやネズミフグは、日中のみあまり泳ぎ回らずに水中を漂っていることが多い。



図6. ネズミフグ

○観測の特記事項

⑩ブダイ科の一種

筆者は主にブダイ科の中でも幼魚を本科の一種として報告した。ブダイ科の成魚及び幼魚は似たような配色の種が多く、目視での同定は難しい。過去にブダイ科の一種と表記された魚には複数種が混在していると考えられるが、筆者が観測した中では大きく分けると2タイプに分けられる。

一つは体側に縦縞が入る種であり、これには過去海中展望塔に出現した、ハゲブダイ・ナンヨウブダイ・アオブダイ・ヒブダイが含まれる。

もう一つは、ニシキブダイと思われる種である。本種は、串本町でも記録はあるが、日本国内における分布記録は散発的である。幼魚は頭部が黄色く体には断続的な縦縞模様が入り、ブダイ科の中でも特徴的な見た目をしているが、同科のイトヒキブダイの幼魚も類似した見た目をしている。2種の幼魚の見た目の違いとしては、ニシキブダイよりイトヒキブダイのほうが頭部の黄色が濃いとされている。また、イトヒキブダイの分布域は主に小笠原諸島であるため、今回観察されたのは当種である可能性は低いと考えられるが、同じ黒潮流域である高知県柏島では幼魚のみ見つかっている。

これらから、本年観測したブダイ科の幼魚の、目視での同定は困難であったため、ブダイ科の一種として記録した。今後潜水時にこれらを見つけた際には、水族館に持ち帰り種の同定を試みようと思う。



図 7. ニシキブダイの幼魚？

最後に、2020年から本年を含めた4年間のスズメダイ科の出現種と、年間の出現ポイントの合計値を表1に示した。また、幼魚のみ観測された種には色を付けた。本年は4年間の内、最も出現種数が多かった。これは、近年展望塔に出現しなかったササスズメダイ、マツバスズメダイ、タカサゴスズメダイが観測されたことが一つの要因である。これらは過去の記録でも、展望塔から見える範囲に出現することは非常に稀であり、地先海域でも出現数は少ない。夏場に幼魚のみ観測されていることから、黒潮の流入状況により出現数が変化していると考えられる。ただし、マツバスズメダイは温帯種であるため、偶然付近を泳いでいた幼魚が出現したものと思われる。また、上記の種や他の幼魚のみ観測された同科のほとんどは、11月以降には、少なくとも展望塔の窓から見える範囲には出現しなくなった。海水温を見ると、11月に23℃台から19℃台へと低下している。このことから、これらのスズメダイ科は19℃以下になると、展望塔付近から移動、もしくは死滅していると考えられる。通年出現しているソラスズメダイやセダカスズメダイも、夏場になると幼魚が多く観測されるが、冬場になると出現数は減少する。展望塔の窓から見える範囲では情報量としては不十分のため、串本におけるこれら南方系魚類の季節ごとの出現状況について、地先海域で詳しく調べてみても面白いかもしれない。

表 1. スズメダイ科の出現表

種名	2020年	2021年	2022年	2023年
クマノミ	16	7	17	18
ササスズメダイ				2
マツバスズメダイ				1
スズメダイ				1
シコクスズメダイ	2	9	6	4
アマミスズメダイ	2	9	9	7
タカサゴスズメダイ				1
ミツボシクロスズメダイ	3	10	5	2
ハクセンスズメダイ			2	8
イシガキスズメダイ	2	3	3	10
ロクセンスズメダイ				1
テンジクスズメダイ				1
オヤビッチャ	12	18	17	22
メガネスズメダイ	1			
ソラスズメダイ	34	36	45	43
セダカスズメダイ	21	22	24	25
出現種数	9	8	9	15

注:出現数に対するポイント:1=1p 2~10=2p 11~30=3p 31~60=4p 61~=5p

串本における海藻の今

中村 公一

以前、本誌にて不定期開催イベント「海藻押し葉体験」(Vol.48, pp.22-23)について紹介したが、現在は開催していない。終了した原因は新型コロナウイルスの蔓延であったが、コロナ禍が一段落しても再開できない理由は素材となる海藻類が手に入りにくくなったことである。

海藻押し葉体験に使う海藻類はいつも、串本町の景勝地の一つである橋杭岩に隣接する、海水浴場付近の磯で採集している。採集は春の大潮の干潮時に行い、主な狙いはムカデノリなどの押し葉作品を作るのに使いやすい海藻類である。この地では、以前は種々様々な海藻が手に入っていたのだが、ちょうど紀伊半島における海藻類の減少が叫ばれ始めた頃からそれらの海藻が少なくなり始め、時には全く生えていないという年もあった。本年の採集においても生えている海藻類は少なく、採集の成果は乏しかった(図1)。海藻押し葉体験については現在、修学旅行などの団体向けに細々と催行している。

海藻の生育状況が低迷していることは漁業にも影響を与えている。春になると地元の方々が、地先の磯で漁としてヒジキを採る姿が町内のあちこちで見られた。しかし、数年前からヒジキの生育が悪く、また量が少なくなっている(図2)。潮岬より東側にある姫地区で採れるヒジキは特に「姫ひじき」と称されるブランド品として世に出ていたが、今年は量が少なく資源



図1. 2024年4月の海水浴場付近の磯の様子



図2. ヒジキの様子(2024年4月撮影)

保護のために禁漁となってしまった。また、姫地区から遠くない海域である古座地区の潜水調査を行っている海域では、以前繁茂していたカジメが大幅に減少し、現在ではほぼ見られない(図3)。海藻類の減少はこれらを餌とする貝などの水産有用種の生育にも影響している。

これらの減少は黒潮の蛇行による水温変化がもたらしたものであると推測される。今の状況をここに記録し、今後どのような変化をしていくかを観察し続けていきたい。

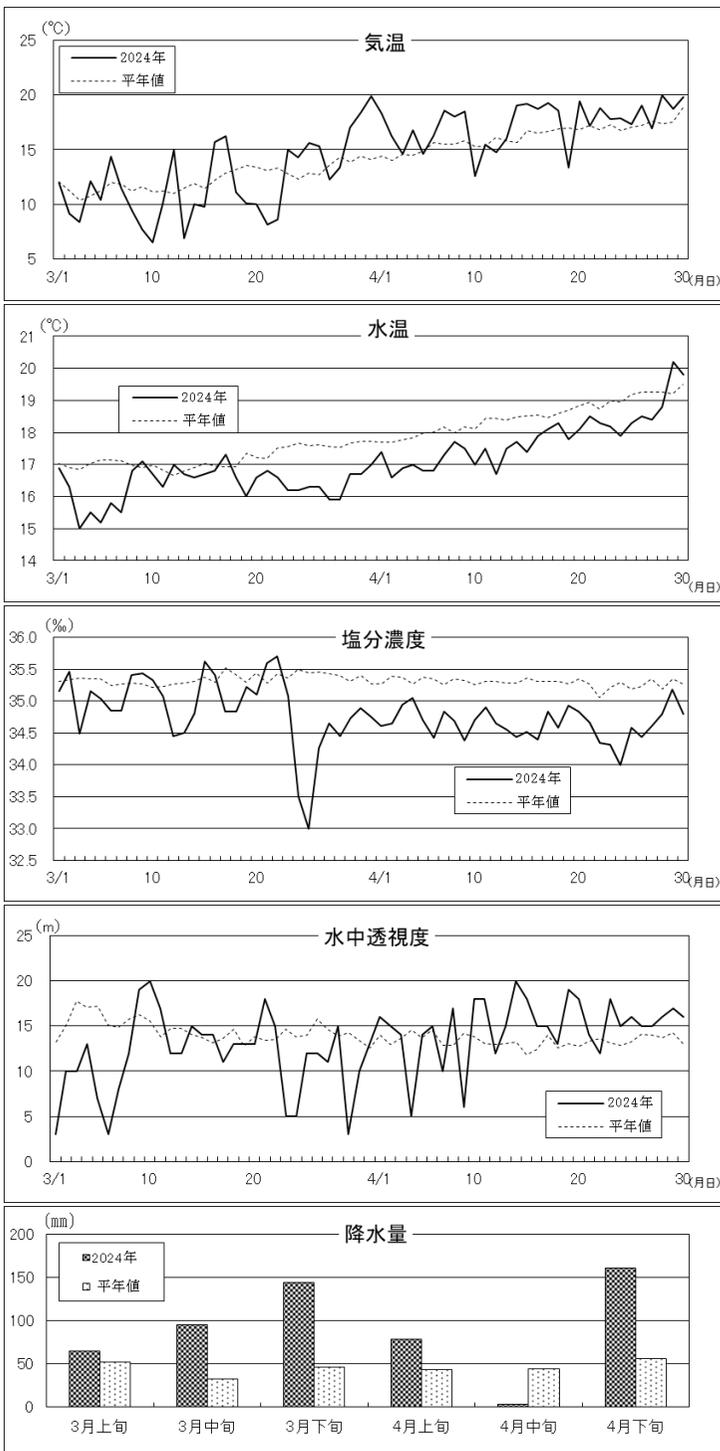


図3. 古座海域調査区の海底の様子

鯖浦の海から

森 美枝

当館では5月の連休明けからアオリイカの卵を展示している。この卵は、串本町大島の沿岸に設置された産卵床に産み付けられた卵の一部である。アオリイカはイカの仲間では最も美味と言われ、釣りの対象としても人気である。しかし、近年アオリイカの産卵場となる藻場が磯焼けや沿岸開発などで減少しており、それを補うために人工産卵床を設置する試みが各地で行われている。展示している卵が産み付けられた産卵床は、地元のダイビングショップ、養殖業者、釣りメーカーなどが中心となって行っているプロジェクトによって設置されたものである。展示当初は、太いサヤエンドウのような形をしていた卵囊も5月下旬になると豆の詰まった枝豆のような形になり、半透明の卵の中には、アオリイカの赤ちゃんの姿が見られるようになってきた。ふ化した赤ちゃんは海に返す予定で、できる限り多くの子ども達が海に帰って行くことを願っている。近年海藻類が減っている串本、もしこの人工産卵床がなければ、アオリイカたちはどこで卵を産むのだろうか。寿命が1年しかない彼らに迷う時間を与えたくない。



鯖浦定置観測結果(月平均値と平年値比)

	3月		4月	
	2024年	平年値	2024年	平年値
気温	12.1℃	-0.3℃	17.3℃	+1.2℃
水温	16.4℃	-0.8℃	17.8℃	-0.7℃
塩分濃度	34.9‰	-0.5‰	34.6‰	-0.7‰
水中透視度	11.5m	-3.0m	14.9m	+1.5m
月間降水量	305.2mm	+174.5mm	242.3mm	+98.8mm

マリンバビロン Vol.53, No.3 通巻 494 号

発行日 令和6年6月20日

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県東牟婁郡串本町有田 1157

(株) 串本海中公園センター

電話&FAX 0735-62-4875

ホームページ <http://www.kushimoto.co.jp/>

(本誌は上記からも無料配信中)